
徒然なる日常 不可思議な微笑

tismo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

徒然なる日常 不可思議な微笑

【Nコード】

N0700T

【作者名】

tismo

【あらすじ】

主人公 兄

おなが いちじく
翁長 無花果

主人公 妹

おなが れんか
翁長 蓮華

05/06/2011 Freitag 放課後

05/06/2011 Freitag 放課後

西日が差し込む教室。

俺を除いて誰も人がいなかった。

俺は静かに自分の席について本を読む。

毎日繰り返し返している日課。

誰もいない教室で本を読むこと。

童話でも難しい本でもその時間に本を読むことは最上の安らぎの時間だった。

窓から見える校庭も部活で楽しそうに声を挙げている部活生達の声も心を落ち着かせるその時間の大切な要素だった。

今日読んでいるのは芥川龍之介の「河童」だ。

冒頭の数ページを読んでまるで「不思議の国のアリス」のようだとなんかおかしく思った。

河童の世界に紛れ込んだ男を通じて芥川龍之介の思想、河童の文化に、寒気を感じたりそんなはずあるかと突っ込みを入れたり、はたまた神経質な彼らに同情したり、俺が主人公の男なら突っ込みが絶えなかっただろう。

物語が進むにつれ男が河童の世界に慣れ親しんでいく姿が俺には不思議だった。

もし河童という種族が地上に上がってきたとき、日本人はどんな対応をするだろうか。彼らが芥川龍之介の描くような風習を持っていたのなら俺達は受け入れられるのか、ありえない想像をする。

読み終わりのため息をつく。楽しい時間が終わってしまった名残惜し

いというため息だ。

すごい物語だった。ただ単にそんな感想しか出てこない。自分の貧相な語彙力が少し恨めしくなるくらいに楽しかった。満たされた気分だった。

同時に集中力が切れたのだろう。静かだった世界が再び音を取り戻す。

教室を見渡すと、目の前の席に人が座っていた。

妹の蓮華^{れんか}だ。

全然気づかなかった。

蓮華も本を読んでいたようだ。本を鞆にしまっていた。

こつちを向いて蓮華は無表情に言った。

「おはよう」

「ああ、おはよう。いつ教室に入ってきた」

「無花果が寝てるときだよ」

傍から見て意味不明な会話だ。ちなみに無花果^{いちじく}というのは俺の名前だ。変わってるだろ？

蓮華は俺が本を読んでいるときのことを「寝てる」と表現する。

本を読むのに集中しすぎて周りで何が起きているのか気づかない、まるで寝てるようだからだそうだ。

そのせいか、本を読み終わった後「おはよう」とさえ言われるようになってしまった。

兄弟だけに通じるいわゆる身内ネタというやつか。

「早く帰ろう。日が暮れる前に家に帰りたい」

「わかった。行くか」

帰る支度はすでに済ませてある。

いつも妹と一緒に帰っている。

考えてみれば幼稚園からずっとだ。

きつとこれも日常。大切なものだ。

何度も同じことを繰り返して繰り返して飽きがくることもある日々。
けれども、自分にとってそれがとても大切で大好きで。
そんな小さな矛盾に気づいたとき少しだけおかしくなる。
徒然なる日常 不可思議な微笑。
少し長くなったが、つらつらとはじめていこう。

05/06/2011 Freitag 放課後（後書き）

この小説は著者の日々知ったこと、それに対して思ったことを双子に語らせるものです。

文章力はありませんが、一人でもこの小説を読んでくださるならばうれしく思います。

05/06/2011 Friday 夜

夜は眠りの時間。

幼い頃父さんと母さんにそう教わった。

だから、夜はいつも早く眠っていた。

年を経る毎にちょっとした矛盾に気づくようになっていた。

あれ、おかしいぞ。

父さんも母さんもいつ寝てるんだ？

母さんは私達を寝かしつけたあと、リビングに戻ることを私は知っていた。

確かめるために眠たそうに目をこする無花果とともに両親がいつ眠るのかをドアの隙間からじつとのぞきながら見ていた。

小学四年生のときの話だ。

それはいつも両親の言うことに忠実だった私達にとっては冒険でちよつと楽しかった。

でも、結局そのときは眠気にこらえきれず眠ってしまった。

翌日、母さんに怒られたのを今でも覚えていてる。

変なところで寝るな、とか、あんた達はそろって夢遊病にでもかかっているのか、とか。

正直二つ目はないだろとか内心思いながら、無花果と私は泣きべそをかいていた。

今ではほほえましい思い出だ。

あの時眠ってしまったって確かめられなかったけれど、今では私達も遅くまで起きててもあまり何も言われなくなった。

だからこそわかる。父さんも母さんも夜おそくまで起きている。

夜は眠りの時間とは限らない。大人にとっては自由の時間ですらある。

ま、私は大人じゃないから早く眠るけどね。

「何をわけのわからないことを人の部屋にまで来てべらべらとしゃべってるんだ」

「別に良いじゃない。急に思い浮かんだのよ。暇つぶしよ暇つぶし」
「はあああああ。じゃあ、もうとつとと寝るよ。宿題があるんだよ。夕食も風呂も終わって後は歯磨けば一日は終了だろ。夜は眠りの時間なんだろ」

「やあよ。まだ早いじゃん。眠りの時間にはまだ早いもの。付き合ってよ」

「はあ。めんどくさいな。わかった、わかったよ」

「さて、何の話をしようか」

「え、眠りの時間とやらの話は終わるのか」

「飽きた」

「脈絡のない女だな」

「悪かったわね。脈絡のない妹で」

「対抗するな。話題は？」

「んー。特にないかな」

「おい」

「冗談よ。甲斐性のない男ね」

「悪かったな。甲斐性のない兄で」

「そうねえ。今日は何を読んでいたの」

「スルーか。・・・河童だ」

「芥川龍之介の？」

「そうだ」

「ふーん。『どうかKappaと発音してください』ってサブタイだったよね」

「読んだことあるのか。さすがだな」

「当然。あのサブタイは印象的だったわー。思わず河童の部分を絶えずKappaと読んでしまうくらいに」

「何だそれは。でも、まあ確かにあのサブタイはおしゃれかつセン

スがあつた。」

「あの時代においては本当に斬新だったでしょうね。内容もまた異質。芥川龍之介のその当時に対する社会への嫌悪が出てるよね。河童の世界を通して社会に語りかける皮肉。河童の世界に対する憧れは芥川龍之介にとつては切実なものだったのではないかな」

「なるほど。よくわからん」

「文章力がある人間だとあんなもの書いてもすばらしいものができあがる。怖くなるよ。無花果はどんな場面が印象に残った」

「そうだな。河童の妊娠の場面が特に印象に残った・・・っていうより怖かったかな。人間があんなことできるわけないし、ましてや赤子にそんなことしても考えることすらできないだろうしな。」

「確かに・・・あんなこと思いつくなんて一種の狂気すら感じる。どんな神経してるのかしら」

「あとは河童の食事情。確かに効率的だが、非人道的すぎる。いや、人じゃないのか」

「あー、あそこか。確かに人間はおるか他の動物達ですらやらないことなのに恐ろしいわよね。やるとしたら昆虫とか・・・蜘蛛とか蟪螂はやると聞いたことがある」

「河童が人間の哲学書なんかを読んでるっていうのはなんか面白くて少し笑っちゃったけどな」

「名作はどこでも名作っていうことじゃないのかな。まあ、数えればきりはないけれど、芥川龍之介自身はきつと自分の考えが異端だったっていうことに気づいていたのでしょうね。だからこそ、最後に人間界に戻った男は発狂した」

「自分が異端だと気づきながらこの小説を発表したのか、勇気が要るだろうな」

「たとえどんなに異端だったとしても現代では評価されている。優れた文章力、確かな面白さ、内容は少しきついかもしれないけど私は好きだったわ」

「うん。すごい小説だよ」

それから私と無花果は芥川龍之介の話をした。

時間は過ぎていく。夜は更けていく。

私と無花果は仲が良い。きつと年が近い・・・というか双子だからだろう。

悩みも宿題も共有できる、そんな間柄。

こんなとりとめのない話が、いつか何よりも大切な時間だったと思うときがくるのかもしれない。

「・・・だよねー。ん、もうこんな時間か」

「ん・・げえ。まじか。はあ、宿題は明日だな」

「悪いね。時間とらせちゃって」

「いいよ。とつとと寝ろ。なんだか俺も眠くなってきた」

「あいよー。おやすみー」

「おやすみ」

夜は眠りの時間。

結局は子供を操る大人の方だったけど、あえて信じてみるのも悪くない。

皆！

G u t e n a c h t !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0700t/>

徒然なる日常 不可思議な微笑

2011年10月9日03時27分発行